書き下ろし――――3

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

赤い熱い海

佐野　洋

書き下ろし・新本格推理小説全集3
赤い熱い海
定価 三八〇円
昭和四十二年一月二十日 第一刷
著者 佐野洋
発行者 鈴木敏夫
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 寿製本株式会社
発行所 読売新聞社
東京都中央区銀座西三の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口七三の二五
©, YŌ SANO, 1967

赤い熱い海 ■ 佐野 洋 ■ 読売新聞社

新本格推理小説に寄せて

松本清張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難渋、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたころに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

も推理小説的手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していたことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は綜合結集したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るというような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならないからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「宝石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説的手法を用いるのが流行した。

しかし、正直にいって、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚りかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ポウのジュパンもの以来、「謎」が伝統であった。「知恵の闘い」（木々高太郎説）なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るということは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといっても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然としてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書下しに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書下しの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書下し小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいささか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違いない作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればぜひ次の陣列に加ってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

目次

新本格推理小説に寄せて　松本清張
序　章　熱い空……11
第Ⅰ章　着手会議……24
第Ⅱ章　小栗光一……45
第Ⅲ章　原島　剛……73
第Ⅳ章　泉野　亮……93
第Ⅴ章　森　良之……116

第Ⅵ章　相田　亙……138
第Ⅶ章　中間会議……159
第Ⅷ章　高江原順介……182
第Ⅸ章　船瀬治子……203
第Ⅹ章　笠原重明……226
第Ⅺ章　古河　壮……248
終　章　赤い海……270
解　説　松本清張　276

装丁　重原保男

赤い熱い海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

序章　熱い空

1

一九六×年八月四日、D・T・Vでは、午後四時から、交通事故追放番組『運転と疲労』を放送していた。自動車の運転が、知覚神経、運動中枢、内臓諸器官にどのような疲労を与えるかを説き、長時間にわたる連続運転が、事故原因の一つに挙げられると訴える番組であった。

画面では、五時間のテスト運転を終えた女性ドライバーが、大学病院の脳波検査室にはいって行こうとしていた。その画面の下部に、白いあまり上手でないテロップの文字が、右から左へと移動して行った。

〔ニュース特報、本日午後三時半、東北航空グラマンG159型機が……〕

そのテロップを全部読み終ったとき、黒尾好郎は、反射的に立上っていた。

テレビの前には、テーブルが置かれ、その上には、英語の辞書や参考書が拡げられてあった。中学二年の彼は、夏休みの宿題をしながら、テレビを観ていたのだ。彼も、マスコミが名づけた〝ながら族〟の一人であった。

「お母さん！」

彼は、なおも画面に目を向けながら、台所にいるはずの母親に向って叫んだ。しかし、番組の続きを見ていたわけではない。恐らく、もう一度、同じテロップが流れるだろうと考え、それを待っていたのである。

「どうしたの？　変な声を出して……」

台所と居間との境にかけてあるのれんを割って、母親の美江が顔を出した。やはり、予感めいたものがあったのかもしれない。彼女は右手に、先の尖った包丁を握ったままであった。

再びテレビの画面に、テロップが走った。

「……東北航空グラマンG159型機が、火災のため、函館沖に……」

美江には、途中から、テロップの文字が読めなくなった。室内が急に暗くなり、頭の血が下って行く……。手に持っていた包丁を投げ出すようにして、畳の上に崩折れた。

札幌に本社を置き、旭川、函館などでも中継送信をしているH・T・Vが、東北航空機遭難の報をテロップで流したのは、やはり、それと同時刻だったらしい。

ちょうど、翌日の八月五日から始まる〝函館港まつり〟の準備風景を、函館局から放送している最中であった。

飾りつけを終り、車庫で待機している花電車四台が、画面に並んだところに、〝特報〟という白い文字が、割り込んで来たのだった。

〔羽田発函館行東北航空機、火災のため、函館沖に不時着、乗客十八人、乗員三人の消息は不明〕

しかし、一般的に、この時刻には、テレビのスイッチを切っている家庭の方が多いであろう。

函館市栄町の井波家のテレビも、スイッチが切られ、さらにカバーまでおろされていた。

井波家は家族五人だったが、このとき、家に残っていたのは、主婦の昭子だけであった。昭子の夫浩三は、商用で東京に行っていたし、長男の昌一と長女の真子は、それぞれ勤めに出ている。短大生の次女珠子は、夏休み中、札幌の育児院でアルバイトをしていた。

昭子には一つの趣味があった。日本人形作りである。三年前、市民スクールで講習を受けてから興味を持ち出し、以来、ずっと続けていた。と言っても、余暇のすべてをそれに当て、毎日道具を展げるというわけではなかったから、平均すれば、毎月一体ぐらいの割で作り上げているのに過ぎなかった。でき上った人形は、知人にわけたり、かかりつけの医者の待合室に寄付したりしている。

そのときも、昭子は、一週間ぶりぐらいに、この趣味に没頭していた。

さわやかな、そして落着いた充実感とでもいうべきものが彼女の中にあった。人形作りに専念し

ているとき、いつも味わうことのできる気分だった。というより、そのような心理状態のときを選んで、人形をいじるのでもあった。

——夫の浩三は、上京の際、商用の成果如何では、帰函がいつになるかわからないと、心細いことを言っていた。その商用というのが、どんなものか、打明けられてはいなかったが、昭子には察しがついた。浩三が専務をしている花井漁網株式会社のための資金ぐりであろう……。この春、会社が不良手形をつかまされて以来、浩三は絶えず資金づくりに頭を悩ましているようであった。

だが、その浩三から、上京して三日目のこの朝、電報が届いたのである。

『ウマクユク」四ヒトウホククウデ　カエル」コウ三』

わざわざ『ウマクユク』と断っているのは、金策が成功した喜びの率直な表現かもしれなかった。そして、そのことが、何よりも昭子を落着かせた。三日目に帰って来るなどとは予想もしていなかったのだが、それよりも、夫が目的を達したらしいことを、昭子も喜んだ。久しぶりに、人形作りをする気になったのも、こうした事情のせいであった——。

いま、彼女が作っているのは、『居合い』と名づけた彼女自身の創作人形であった。稽古着に袴をつけた若武者が、腰の大刀に手をやり、まさに抜こうと身構えている……。テレビで居合い抜きの紹介を見て、それを侍の人形にしてみたいと考えたのである。そのため昭子は、剣道の指導書につけられた写真を見たり、道場を見学したりしていた。

片膝ついて、刀の束に手をかける、そのとき袴の中で脚はどのような形になっているのか？　昭

子は先刻から、そのことに神経を集中させていた。芯にする針金を、いろいろに曲げて試みるのだが、なかなか満足のいく形にならなかった。

昭子は頭を上げ、首筋を叩いた。四十六歳、すでに更年期にさしかかり、根をつめると、すぐに肩が凝る……。

その、昭子が首筋に拳をやった瞬間を見はからっていたように、ブザーが鈍い音を立てた。昭子は反射的に、時計に目をやった。四時十五分である。浩三なら、帰宅する前に、会社に行くだろうから、こんなに早いことはないはずだと考えながら、彼女は玄関に立った。

隣家の主婦、細川月子が顔を紅潮させて、そこにいた。

「あ、奥さん。さっきのお話ですと、ご主人はきょうお帰りだとか……」

「はあ、何か？」

昭子は眉をひそめるようにして聞いた。昼すぎ、手紙を取りに門まで出た昭子は、そこで細川月子に会い、立話をしたのだった。そのとき、浩三が帰って来るということを告げたのであった。しかし、それにしても、なぜそんなことを――と、昭子は訝しんだ。

「あのう、まさか、飛行機では？」

「ええ、東北航空で帰ると言っていましたけれど……」

「じゃあ……。奥さん大変よ。東北航空機が、火災のため、不時着したって……。いま、テレビに、特報がはいってましたわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co